

大学教育では、ライフコース選択への意識化・取り組みが、学生が大人へ向かう契機となると考えられた。この際、何かを達成するというよりは、社会文化的環境の中で生涯にわたって柔軟性を持って主体として取り組み、自分の居方を見出し続けて生きていく自分をイメージすることが、エンパワーメントとなると考えられる。漠然とした万能感と無力感の揺らぎから脱却して、限界があることを承知しつつ、その中で生成し続ける存在としての自分を感じ取る。つまり、達成・獲得とは異なる大人観が重要なのではないかと考える。

崩れる子どもと大人の境界：学校の予期的社会化機能との関係から

松浦 善満

青年期の延長、周辺化、さらには「脱青年期」(post adolescence) の必要性が叫ばれるように大人社会に参入できない若者の実際的増加をどのように見るのか。私は、若者の「モラトリアム」意識の拡大、「自立心の欠如」といった心理学的側面よりも、むしろ日本の産業構造、雇用構造の変化と学校教育のもつ構造的な問題から検討するほうが有効ではないだろうかと考え、以下3点について報告した。

(1) 大人の定義については、「性的成熟から結婚・家族の養育、ならびに職業に就き経済的に自立すること」という従来の通念を改め、G.ジョーンズ(1998)らの提唱するシティズンシップという概念に注目した。すなわち大人とは「社会に完全に参加した状態」のことだと定義し、社会の構成員としての地位・権利の獲得が青年期から成人期の移行に必要な点とする。ここでシティズンシップとは市民的(個人の自由権、財産権、国家からの保護)、政治的(普通選挙権をはじめとする政治参加権)、社会的(教育、住宅、保健、福祉)シティズンシップの3つのカテゴリーから構成され、イギリスでは歴史的に蓄積されてきた個人と国家の権利・義務関係だと位置付けられている。

(2) 大人になりにくい問題状況と教育システムの間接性については学校の従来から果たしてきた「予期的社会化機能の不全状況」について学級崩壊現象を事例に論じた。すでに子どもが群れをなして成長する「少年期」という機会を喪失しつつあるなかで、緊急課題として学校のカリキュラムに地域社会や将来をテーマにした青少年の進路形成プログラムと具体的実践が必要である点を指摘し

た。

(3) このテーマに挑戦する試みとして私自身が5年前より和歌山大学の同僚と取り組みだした「スクールボランティア活動」の様態をビデオで紹介した。この狙いはボランティア活動を通して学生に社会に参入させ予期的社会化の援助をおこなうこと、さらに教職を目指す学生にとって学校現場の日常から学びとったことを卒業研究に生かすことにある。実際にこの活動は他の教員仲間にも広がり学生の成長と社会化に一定の効力を発揮しつつある。なお周知のように全国的にも学生の社会参入が活発化している。

指定討論

臼井 博

青年期の終期を決めることはきわめて難しくなりつつある。現在では子ども、青年、大人への移行のプロセス自体が境目がはっきりしない、シームレスになりつつある。多様なライフスタイルに許容的な文化ができつつある。このような社会においては、青年個人の生き方なり、生活を自分が生きる社会の中で位置づけること、言葉を換えると自分の生きる意味を構成できることがより重要になっている。加えて、ジェンダーの視点を取り入れることは重要である。

坂西 友秀

子ども、青年に伝えるべき大人の文化が不透明になってきていて、大人自身が明確な自覚を持っていない。親もふくめて、私たちの大人としての生活能力が充分発達しない。社会は何のために構成されているのか、何のために生きるかなど、大人が自分の人間観、社会観を自分の生活やことばで日常的に子ども、青年に伝える努力が必要である。「むだ」があり、「温かさ」「おもしろさ」のある社会を、大人が生きることが必要である。

討論のまとめ

会場からの発言のなかで、生涯発達心理学から考えたとき、世代と世代をつないでいくこと、また大学生が在学中に社会とかかわっていくことの意味などが提起された。最後に、大人になるためには、子ども・青年があてにされ、大人をあてにするというような関係の構築が課題であるとまとめられた。議論の継続が望まれる。